



画

系

集

五



元禄五年申冬

冬ふとらり人も幸をれそらし
中多し紅年たふま乃あつと
汁乃老多し川林の風をれ
高の月も美し入るや古に
了川一丈夫下れ蛸屋の釣振

冬
許六
洒堂
袋水
嵐
執事



白紙

女をよれ傳事中に焼くは
焼くは〜小つまの〜
粉つじ毎の繁多と明〜
懐^{カイ}礎とのけりな良乃入口
中らハ纏いぬ人小うら更
舟述のけり 堀のらハあき
宵圓らあ〜種^{シノ}の言述
少〜新の風〜
ハ〜丸^マ丸^マ〜
焼くは〜えのまの〜

水 六 葉 水 六 葉 水 六 葉

折起ハ畠し〜
頼も〜
ま〜
尚磨之盛を〜
所〜
お〜
山〜
兒〜
尾目〜

水 六 葉 水 六 葉 水 六 葉

聖女堂の女房

水のやうに流るるもさうへふうの真
 花の影をさうへふうの真
 みるのやうに流るるもさうへふうの真
 花の影をさうへふうの真
 一節も青くはるるもさうへふうの真
 花の影をさうへふうの真
 宗長乃とさうへふうの真
 花乃とさうへふうの真
 七十の賀のさうへふうの真

水 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

うらやうりくをさうへふうの真
 花の影をさうへふうの真
 目よとさうへふうの真
 花の影をさうへふうの真
 夕月のさうへふうの真
 花の影をさうへふうの真
 肩てさうへふうの真
 花の影をさうへふうの真

七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

是のよに茶種ふして茶子の茶
葉と煮てふりし泊瀬の学寮
下張乃反故又てすく杭して
つりて大猫。芽をむきあて
むつりしや襟よりしぬ乃息
祝法度と 悉や 勢あり
取乃雨意のしりてさきむ
三寸の雨を——しむ層
まむらと連をくらやん影の月
茶と 芽久とにきささるる夜

杏 山 隨 堂 晉 隨 山 隨 堂

思ふに和当も友を杖の庵
たうにたうを揚る第戸極
山色のこころあハ——つや
孫婦りうら。 念歡の下言
うけむし積るる床のしほ家
ひもをぬ 舟ふ 豆の汐傳
ま色るて曹洞宗れさくう
集はにににににと焼
尼ぬあをれ人よを急げたり
けうさ すらわらけうか

杏 山 隨 堂 晉 隨 山 隨 堂

珠〜〜き星ハ皎けく夜の月
 わ〜〜りけ〜〜めれき位〜〜
 松〜〜けと〜〜江海〜〜ハ山〜
 息〜〜ち〜〜子ハ〜〜下〜〜
 亮〜〜した御堂〜〜外ハ累り
 とふの名み〜〜と〜〜物き
 け〜〜を申て〜〜
 胡蝶の〜〜けれ ま〜〜
 瑞 山 堂 並 杏 晉 山 堂

元禄六年 丙春

傘〜〜打〜〜け〜〜
 扇〜〜の筑片〜
 徳月〜〜い〜〜火籠〜〜
 史の考〜〜 礼〜〜
 洗滌〜〜と〜〜つ〜〜
 左〜〜れて又 初〜〜吸〜
 七世 沼子 涼亭 地坡 利牛 宗波

海入流のいりまけにて暮の垂
 馬鈴の杉の朽一宮て 立
 といひさし一廣その葉を二分指て
 夕もあつたに夜とおてしり
 いせの速又夜替とておは
 露のつらさる 居らのさる
 逢とてい名目と六のうれを
 のほるゆ和の湯のくらう
 杖もそや絆てとらりし廣りし
 ともたすす子のかきゆてや

子 牛 坡 波 蕙 郎 翁 波

まはるる中るおしはるる
 かのの葉とそよふ 麻と
 ちのそよすすれのとよくと
 け斤にゆくとむ指を日
 かるふの指ハ海をうきもせ
 先もうらる 高のうらつ
 といひさし名をたにもふ名を指て
 丸ららする 結のやまの
 祝も母もそよて 流めらり
 といひさし 女もそよて 安の星

牛 子 坡 翁 蕙 牛 翁 坡 翁

足場よよりの細る一節に
 麻巾よ花の跡しつゝ
 意はよちひさる延ハ群勢まで
 日五十月に 居あくるつま
 意うけハまも延ハ意を
 荷あつたをととハ一ほり
 ととに在 哲ハ侍と登の
 身入もあつたのよと
 切株もあ本ハ意のよとや
 うけらあつたの細 澁

子 良 牛 坡 壘 水 坡 牛 良 子

家松橋のねとりしつゝ

管やうたつ海士人よ
 松のまね 管や名よる 岸
 志は千の松を 意くし 壘
 几中日のらつゝにうつろひて
 月うさるれハ 鐘うたつ
 礎ハたつあつたハ 此の
 母とそかハと 居ハ 案守
 以ハもや 澁の跡わさくか 壘
 意ハに 欠おの 後切ろしつゝ

下るるくよまゝいふの目の表の巾
 との取くよまゝいふの目の表の巾
 いろくよまゝいふの目の表の巾
 石をき川よ 木をき 海をき
 連きく旅きは移るく 一乃移る
 月よくろしよ いよまゝ 面あり
 新よの娘よい 君よ 母わやま
 ころのちよい ころく 智わ
 されわれい 狭よをちの位は
 燈をよとて ころり 移るく 是

かけろよの移るも細き歌の友
 几帳よりこれいませうり
 巧いをね位よあふたる 移りて
 毎と 意世に 移りて
 うきまをて 移りて 移りて
 ちくく 心を 述おるす 見
 移さちや 何や 移りて 意の月
 死をの 神に つまひれ
 移る場の 本橋 移りて 咲つて
 移皮を つまひれ 移りて 船双

朝霞以紀の貴之小西酒とりて
 家一とより 杉 跡 跡 あり
 おりもにけきくみちや岩の志
 屋のふゆハ 証うまう原も
 去の跡かのれかきにうりあり
 吹雪の神を ふくよ 見才
 杉竹の冥加とらうむくあ市
 磨 去たる わつふの 母

たをを成る物にのよ

ーほー

八九回えて雨さるや那ふか
 まる乃くくぬの 畠 何るまら
 神前とるる士も好む此母蔵き
 内ハと成はく 受乃 振ニ殊
 きのさく日初るる 月のま
 物脊うれて 乳さうまら

志保
 法圃
 馬葛
 里圃
 法
 意

淡柿もよよの風よ吹れたる
 孫の泣くる 祖父の 借砂
 わよわよおぢをばらけりる 孫の泣
 蝶をよよのや 降の辰
 踏来此小鳥一羽け 賣よよを
 十里とくりり此余は一むり
 毎のえん少強 堪くわりしき
 あゝさうしつと門のよお
 いつくつほの沙汰なきて 惣つと
 やりとすおは 京のえを 連

里 苺 沽 里 苺 沽 苺 里

宵明小ひさくく 花乃たてあは
 りんりんうらうら 靱のえん
 まききとえあれ、 作たま
 仔細の 下向よるらうらと
 長おに小翠の仲るらうらと
 くらりさうらうられらうらと
 禅もに一日揺らふ 砂のえ
 柳の角の えんね 費ん
 濱の牛に俵をえんや
 なれぬ娘しはうらら内侍

苺 沽 里 苺 沽 苺 里 苺 沽

月約し侍や旅乃ららそらみ
 まつきの葉の名をささく
 ちれて来て葉も板もむしり
 付傍るしゝのうよのこま
 割 ちたも刀板のちの風
 まつきのほしゝのさけんは
 川まぐさ程に花するねをや
 そ川と火入りしゆゝの葉
 花はとやあゝぬまれあゝれ
 漱しゝのほる陽をのぬ
 里 葛 沽 蕙 葛 里 蕙 沽 里 葛

空の海や葉を小庭の別室
 よき雨あしははる葉 俵
 新の糸細子賣の糸や
 ひかる葉のおもあそび
 かんくつと月をささく
 樽 壺 けりてくも又
 子冊 杉風 柗隣 八葉 蕙

任くくして任るこたつぬやうれき
とくともうれ 候風乃る者
よき黨小お減ぬせそ 候由く
ちいさようけの 身 晴くよれ
高ひもゆらくと内のときまうて
山乃うよある 下市のちと
弟の外れけそい 候れきむつ
にのの月もるこくうきいけ
候よそも 細のそれきいけて
ひさうの羽のそえ あふき

冊 風 隣 業 蕙 冊 風 隣 業 蕙

きくくとそのもくきよあら
とくたひ山くうけ 候人たあ
正月乃まきを 候人の 候
われたる 儀をこくいけけ
空れ海をてく 候乃けうを
あつたれいづる 女 房
けきハも利上をうけたもの
あんと今期を 候をきよ
結核をあををけいお 切入く
とせらるる 候よ 候ハもくき

冊 風 隣 業 蕙 冊 風 隣 業 蕙

乳りけてこゝろの月
 ようとれもさよふそのを前
 紫栗の葉もつとりと海うら
 玉うらまゝの人よそののらふ
 用しうらに描て侍支度
 妻及少けいさうりさうり
 くのちんさうある程はこれ
 日鹿のぬきを花よれ也
 庵に流し葉や枝よらまに
 小舟とまらぬ池の心吹

珊 風 隣 葉 風 珊 意 葉 隣 風 珊

空を此れをちんさうにかりまの縁
 屋のらひるのをさう 隣川
 上法をとほさぬ程のさうりて
 うらと現はけ海のられ中
 葉にみたりれとねて花ぬ育の原
 とさうと磯のさうり 杖風

疏屋 空成 依水 利牛 蕙 屋

きりり〜以新のよきを唱と〜
晚の侍より乃ユ夫〜
妙を結さ〜
僧都の〜
風御う〜
歌の流れ〜
結け〜
葉のう〜
け〜
枯〜柳〜

水牛 屋 魚 牛 水 蕉 屋 水 牛

言れ〜吹〜
ふ〜
あ〜
ら〜
は〜
を〜
を〜
を〜
を〜
を〜

蕉 屋 水 牛 屋 魚 牛 水 蕉 屋

息災くし祖父の白髪のめくはる
 堪思う〜ね七夕の照り
 名月乃るに合せたて草烟
 下〜〜りきそ〜〜る結
 比の六岩の舞りも落〜〜
 山の根際ゆゑゆる〜〜なうわ
 横をふ〜〜く風の吹とら
 出〜〜のうに〜〜をさえつる
 苑思ふと女を〜〜うれさす
 余のとられ〜〜に暮れた命〜

水 蕉 牛 屋 水 牛 屋 蕉 牛 水

葉やねの葉り〜そのりあ
 おのれ〜と樹〜鳴やも
 絆落〜〜うわよ月〜〜と
 序下〜〜ちるてゆ〜〜板の音
 ちや〜〜す酒よ息子の音〜〜で
 葉丸た切川上の山

史 邦
 治 圃
 と 世 茂
 魯 可
 圃 邦

さうくと飛のおうきくす拾ふ
寺よ帰れハすりるむき食
雨さくくくくくくくくくく
祖父あつと宋よくくく
子供みれ美走神とくを
陰るをくくくくくく
きくくくくくくくくく
んせとくくくくくく
鉄棒を戸塚の高の侍ら
後疫病のくくくくく

可 邦 圃 可 意 圃 邦 意 可

すんまると苗代めくくく
光のくくく 停務のくく
去風少くくく 厚くく
質よなくくく 百雨乃
久くくく 疼くくく 化
草くくく 白くく ぬ
穰く 厭離打くくく 鐘の
弁 尚 けくくく 居
うくくく の 作 後 十 叟 とき
名 古 曾 ときくく 意 義 の 子

可 圃 邦 可 意 圃 邦 意 可

うらけいゝ。おまふと松の同く
 枝をゆゝに 青の月鑑
 水志と緑のくはく風は身よ入る
 ちりりーはあもさひまらる見
 すくえとてすくはに花をさす
 夏も小野まは 音々 鳴
 雨ふれはあつゝに古の白い
 縄てーけーあゆもさり
 陰ものにて咽さるるふあがり
 たふはハやうさるハ手あかす

可 圃 邦 可 里 圃 乙 治 里 治 治

あまよゆハ花をさるあがり
 白双交ふ 草ーつらなり
 中汲の破も反又推さけて
 月の徒又音あつー
 鳴吹ハ枝の葉さるるさる
 枝のほろり又あまらあめ

瓦 孝 乙 世 成 洒 書 峯 峯 壺

簾戸小袖は赤ふ日のうつり
 思ハ 寄く 梅子の の時
 泣切しそ古きあはれ方のまら
 此意はうて ちまうくをくし
 つく小笠の脛とくりりま
 むしろ 踏まとうつす 踏 綴
 山うけとまわれし出さる牛の尿
 梨子地 寄るふ 児のこけ 鞆
 名月小雲井の橋を記しきけ
 くの果と脊切しうけりさ
 東 寄 壺 寄 壺 寄 壺 寄 壺

茶とあそ 家名ハ如 浴衣を
 去ハ かりりぬ 三浦の人若
 かけろふの屋小横 踏まうて
 色む 衣又 着着 とうりま
 きんとつし娘ハ 存のそのまひ
 意の影れを こそ甲鳩物
 堀代の風ハ 三ましぬ 田ハ 寝て
 空 浴ハ 伴吹て こそき 秋風
 夕月よ 若くを おろす 鏡の音
 年ちしよせり 笑の制し入
 東 寄 壺 寄 壺 寄 壺 寄 壺 寄 壺

麦飯子まきしぬ食を食らて
 徳利 川す。川舟の袖
 うひくた風も涼く中し小此
 聖のききとたううれの各
 英しふきとのうけひと似てき
 人目とまきと引きく珠敷
 一息小 地を控現のきけり
 猶よ日のさしまうきく
 嘗ハけのりれ いとい唱
 果 且情をとるくそのあひ
 菊 巻 巻 菊 巻 巻 艾菊 巻 巻 菊

いしきしつる響川すきあはれか
 海れの形よ 折る ろくは
 若らつれ明座多く戸きして
 之法 きける 穂のき食
 夕月よ 空をきくつて文しき
 衾をそくす 秋 ききより
 馬巻 巻圃 菊 巻 巻 菊

高島よ治のやうく下姑の音
大英の葉の葉をうさふも
ちうまぐ猪わうやううぶさひ
孫ふももふ りんその
持住まふまふよ出まふ人
あつまふとほあてふる籠餅汁
約の餅十かまのお場まり
伏見の橋も 糸のなかりそ
橋へまて入る 交るりり
親仁くともかるとも

高島 圃 苑 圃 苑 圃 苑 圃 苑

月をれの音くは込よせ 夏磨
けろふたらて餅ハまれたり
うまのともくさるるまの風
つこの丘ハんきいをた
時の声に一切るの聲と声り
蘇より籠籠と出せ丸
うすまふねおまふまれくま
言の油江の山とくま
入口ハねまかくの木扉
伝取あふと餅ハまけま

圃 苑 圃 苑 圃 苑 圃 苑

馬のふ神ハ豫の赤くふて
呉海の柔碗とくうらたおと
なま豫の二階と豫言の因縁
月ととまりに 瘡痕とす
新うまの一とんと申ふすま
情ふ破りくる袖子の切る
秋のえとくくくちる旋功者
有か性あは せぬきりほり
不ろ後ふふ片く山のあつ之位
田舎の若ふなまきううい

菟 菟 圃 菟 圃 菟 菟

猿今のたりれさるゝ露の招き
日ハをさつれと けりうさるゝ
あつち地の中よりあつち
篠竹よよよよとていさく
鶉のあつちとやうそまの月
そりのなさに又をたつた秋

治圃 也 圃 也 圃 也 圃 也 圃 也

くささるん一花てあふら箱の急
登麻のくせをあはしりたき
舞りてあふらせもに物さり
中へ必とせ此 状乃若古太
都此日多とこやと振よりれ
むとく 羽ありらうせてたつ
音あふらまきまの比の揺楓
山一門あふらあり明の月
初あふら留れ人乃うけ返り
水きたは光れ 溪の小鍋

然 考 意 然 考 意 然 考 意 然

ふてきる紀之井きふれ嘆りて
花もらもてりていへきふ日
くらせの又 ああだうあふらり
あふらと孫を 大幸うらう
ほほひの内候いと度屋きう
喧嘩乃とていも じあてせられぬ
大切を日うこわあはれこれの月
音くふらうけし中 のとら道
あふらけこのきうけハ皆あふら
美の世あふら なきの作

意 然 考 意 然 考 意 然 考 意 然

酒をうもか育のやほきく月見く
志 鶉 双 と 庭 乃 正 西
宮 々 ぬ 娘 の 々 々 々 々 々 々 々 々
桑 斤 の 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
多 翁 を 侍 々 々 々 々 々 々 々 々 々
大 二 つ り ひ の 美 々 々 々 々 々
第 少 も 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
り 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
け わ 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
鴨 の あ 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

考 然 意 考 意 然 考 意 然 考

振 々 々 の 々 々 々 々 々 々 々 々 々
際 て 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
虫 匠 々 々 々 の 小 々 々 々 々 々 々 々
斤 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
好 和 の 隣 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
々 々 々 本 の 安 々 々 々 々 々 々 々 々

と 成 中 坡 孤 登 利 牛 坡 寂

網のち 壬午舟よ 蘇ううけ
軍 氏くふくしを 二十八日
到るふはよに 軍のちをせ
淡島のちに 穀後もきぬ
ぬしむ 籠城灯と吹々し
肩くせに 注 湯やのち茶
うふおのち 子判もうふのち
るに 抄ぬり いらして 蘇する
殆くの 七つ下り 言つた
坪ふつ あり 乙 十石 銀

牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛 屋 坡

け 崎の 磁 兎も 多き 月と 意
砂ふ ぬらこの うつる ちくち
新 島 の 葉も 落つて 雪のち
吹と くれさる ちぬ あり
川 くの 帯し のち あり あり
平 地 の ち の ち あり あり
手 油 と 白 白 の ち あり あり
塩 出 け 鴨 の ち あり あり
筭 舟 よし あり あり あり あり
又 あり あり あり あり あり

舟 坡 牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛 屋 坡

さくらこと大崎のにっの
正平の好む 杖の辻之
中流て傍半会のきき
習と叩て 移せぬ 夕月
凡やとて 杖の路の尻さより
錠の鳴まのつふとひりゆ
ら〜ゆ〜と米のお場のしり
目くらまりのつれの移ら
何ともしこれのや中時
端炭のらうと〜よん

牛屋坡 翁屋牛 翁坡 牛屋

さくらくやとぬのうら 白の傍
抱てうりり〜 大根
友多ハ 杖とく 杖とく 杖とく
つふ 杖とく 杖とく 杖とく
やうゆきも 杖のり 杖のり 杖のり
け 一谷ハ 杖のり 杖のり

とや成 坡 翁 坡 坡

七十よあゝと収ふ 仰杖お
 と尺とゆりうゝの片ひ
 涼さハ野田のお崎よくと
 塙と牛の 疋肥と休
 すも海とちの男めとちり入
 そ日ふりと 孫のこひれ
 おつめる師走の口とくひとて
 とふとを針とちあす主筋
 田の中ふりせねるのひふり
 夏よ冬つと月おちらふ

坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁

花の時祖父ハ 夢なまきれなり
 儀て米とす 春の花え
 廣をにまの結露と 引ら
 ういまりる子のよとす 居は
 うとを 根鞭のうとやふの春
 蛇の強のいむ 春先
 のよりと男ハ足煙の追
 法て海めむ 糸の まく
 とうくと板ふ凡の常と春
 梅めす人の強をとよやる

坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁

月とれか 祝よふきのあまこころ
こぼれて 高いとくしりや
彼よとるあまの斗ハ 縁結まそ
は けりりともす 舞うさこのあ
田と 柿さる 白を 江の 橋の 末
と 雲に ちりし 膏の 糸 唱

坡、 畝 坡 畝 坡

翁ふき言白事

故ふ皮首終

芥焼や 丁う 端の 田井の 初少
着てきし 卵うむ 能
かり ねら 以 踏と 造ふ ちり ぬく
おし ぬき ぬき ぬき の 柿の 末
月夜 ぼろ ぼろ 儀の ちり ぬき
ゆとむ 牛も ちり ぬき 朝亭

と 成 溜 子 涼 糸 子 意 糸

寤—母の小村小証をたつよ入
 榎乃す息ふのこる—しり縄
 あらと飛去りれ鳩の小きいり
 塀をくちりちよきしぬる魚
 日市うり、孫う吸筒抱きせて
 和田秩父とももくりりる堂
 うけも乃母を、洞をさす—き
 余はささうりくく月乃をきか
 虫とりと志しそけ平れやらが
 ねもすきしもまはの柱

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

富ハ程いのちなるなま花のつひ
 破毫ハ巾ぬうくひ丁のきり
 雪玉ハまをさるのつかうれく
 日記片さうし—一帖の残
 旅書やまうさ五月の舟より
 名跡をくせき あまの廣海
 高位ハく—ぬ仙母もつり
 ぬ茶とうる海乃 けく屋
 焼たてく庭又熱するさの月
 よきさうし—も肌はさき風

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

幽卷五

二十七

子の年ハ 飯流 更おようほして
 うき名を たつれ 布て 慈ほ
 張 行と 摺 履を 居めて 孫や
 美 菜 壺 出 床の りて
 ほとく おひ 下を 巾と 故や と 約う け
 湖 あり も 一し じ 替 田 代 船 智
 う 以 雪の 上 六 あり れの ころ くと
 儀 乃 ち ち り を た ち くと ち ち の
 お いら ぶ 子 供 だ する 袋 所
 わ っ ち 山 一 う 急 ち ち 井 の 言
 子 菜 豆 子 菜 豆 子 菜 豆 子

を 白い 柳 ち ち 一 ち 一 水 仙 心
 七 屋 ち ち 家 の ち ち ち ち 落 雪
 朝 ち ち 柳 ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 洗 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 中 老 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 以 之

身はかり〜ひ集〜をとりて
 何〜ひや〜ふあうてや。
 引後のむら〜ふ〜
 穀〜らあ〜仰〜
 あり〜目〜
 古のゆほ〜
 苑〜坊〜
 穀や〜
 みの〜
 柔〜り〜

扇車
 冷水
 梳毛
 梳毛
 梳毛
 雪丸
 雪
 燕
 水
 考

ち〜苑〜
 二月の雛の〜
 行〜
 小細〜
 思〜
 苗〜
 菘〜
 松〜
 雛〜
 雪〜

之
 先
 厚
 瑞
 好
 丸
 羅
 燕
 瑞

小こくくと牛乳は盤の夏えて
院も——と佳たまひたり
やそくたに鶴のふくは想の月
況平のふあ——と下多てあつが
あれ歌いあう新酒を——とあ
るはるふく——門の林——と
于箱の邊か——と——と
うけの——と——と思ふ小憚
嘆えれ小柳ふれ——と——と
む——とをを思ひて紀ふ——と

水車雪先居之庭丸好考

此所とは山を四面や老古の里
まうてはうくくたる炭の
いせさひらちると一種は硫を
波——と花らむ——と子思を海
津——とくくか云云と月
砂美乃門也——と

支考
淡水
白雪
雪丸
菅原
極端

小地取のおひまを居る萩すよ
終りれしはね下まのあはく
流音の梅あにふあてはをさる
代舞をいのみる 九世の観音
侘人はあはくはとさす小袖桂
あはれをさすつてはの片系
熊の子れあやをさすてあはく
ふりてはをさるるるの三月
定初るいろはを善徳よりさ
新あはくはねりもさるるる

扇車 以之 枕先 芭蕉 考 階 層 丸 車

花らさくしとねるさるるる
まともいんわ 火屋の白糸
やうくとあはくはさるるる
後子のあはくは味増の曲物
あはくはとさるるるるる
あはくはのあはくはとさるるる
あはくはとさるるるるる
あはくはとさるるるるる
あはくはとさるるるるる
あはくはとさるるるるる

之 柳 簾 煮 雪 浮 先 鯉 丸

巾るく此也はよて貝わし負
 乞食とありて夫婦りてふ
 さしむける宵中れ高と打払ひ
 きれきる路とおしきんら
 素海をとりお守えうけてり
 花を負なる牛のぬこらふ
 免こくと日向乃このささり
 柳のりともやれりそ降
 念仏よすめこらふるふの夏
 まさしくたひ乃降りてお守

考 兼 厚 之 車 仔 雪 水 先 瑞

雪よとたうけをるに心は
 けしとてきく浦のしほ枝
 片ふれ魚の心もとてきく
 ともあつて厚れおあしと
 乃とらうきく空の柳咲朝月
 瓢箪を荷しきまればあらし

水 越 越 友 友 宗 波

一里片も何となく此津さひく
久とりのそふじ 米朝の登
かききく。書物をとねの枕
うむく 松くー母乃知もひ
蓄りてはるる川も三升の結
らくもらひる。たく一儀
敷所れく移りて牛此夕す
流之小さとる。猿乃いふつ
ありれ像を掛す。海の月
浪。すひん 禪れ魂の高

嵐 雨 夕 糸 海 蕉 水 波 洞

わつとをを 移るの印に極うと
去の程ひよ 母袋くうん
作りの象と ちるちせの星
中火に火く移るく今ちかきる
後乃其の罪とやうん毒はら
九端片ゆらぐ くら石を塔
とくひの書うとく行吹あ
ちるあをりを 所は夕月
好らむくあをれと捨ふ虫の壳
瘦たる 乳をーけるあは

良 通 糸 竹 玉 水 竹 葉 糸

ととむお小猿所〜ゆ〜ゆやの内
 じ〜小〜方も情〜〜ん
 を〜に剥〜る傍を師〜と頼ひ
 々〜本を〜〜てあ〜る老の目
 か〜〜を神れよきわりの時
 牌〜に五人ほえて〜〜き
 夏笠もあ〜れふ〜る熱中る
 象〜少は猿の 小〜るま〜川
 俵〜筋も〜れふ〜る巾着ん
 麻の〜り〜にほ〜る心〜ふ〜

蕉 魚 良 水 竹 蕉 魚 糸 乙 棠

せ〜〜るゆ〜らふ〜るなま〜これ
 ぼ〜〜の〜あ〜る〜ま〜く〜の蔬
 代官れ飯屋〜をれ月を〜る
 あり風と桶の筋を入〜る
 酢〜う糟を控れ〜〜の川〜は
 々〜も控ん〜〜〜お〜漬
 親の〜を〜〜〜醫志〜は〜た
 舟〜〜〜〜〜る徳のゆ〜

水 蕉 、 水 、 蕉 水 水 蕉

音笑れ〜〜〜〜〜
 梳〜〜〜〜〜
 麻衣を〜〜〜〜〜
 中箱のあれを〜〜〜
 と〜〜〜〜〜
 洗〜〜〜〜〜
 造〜〜〜〜〜
 与〜〜〜〜〜
 ち〜〜〜〜〜
 伊〜〜〜〜〜

水 風 水 風 水 杉風 水 芭蕉 水 芭蕉

大通菴道公述言

ち〜〜〜〜
 葉つ〜〜〜
 風の〜〜〜
 内洞の〜〜〜
 油草を〜〜〜

芭蕉 夕景 苔翠 友白 素堂 路通

清くもよやうと初えたる地終て
 われをゆしとらぬ事より
 君いことうとすれ表をあらそ
 考う所しきと名はすあ
 毎うとさそわくつゆの所は
 とねりをたぢぬ吾れは厚の
 筈の月風吹はひふし細く
 地よあつるれ移を奇しん
 しらうれぬ金の事さう物ごと
 ぞおれ小ををしけし師の切

曾良 五 壺 翠 通 菊 良 蕙 貴 良

孝れ付これの意劇しは
 也も小能をとまじさ川
 けふも乃隠居とめて只世
 けりのからをとすむと乃子
 おむじうとむ箱の月
 猿ハふすおれまうけをう
 出らとえし仏の結をとらし
 ゆめとねのいなくさうわる
 振神ういつそ抱む月のあけ
 奥しとやぬむ葉のしと

通 五 翠 通 菊 良 五 壺 翠 通 菊 良

意
 子
 柔
 良
 聚
 通
 也
 慈
 良
 業
 一
 可

意
 子
 柔
 良
 聚
 通
 也
 慈
 良
 業
 一
 可

